
銀色の悪魔

ダージリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の悪魔

【Nコード】

N9867W

【作者名】

ダージリン

【あらすじ】

人間・精霊VS悪魔の戦争が繰り広げられる中、悪魔混じりの青年ユリウス・オルセン（紳士だけど腹黒）が、魔王を殺すために人間・精霊側の戦士養成所であるシュヴァリエ学園に入学する。彼はそこであらゆるものを利用していきます。復讐のお話です。

序章

この世界アルメトロには、人間、悪魔、精霊の3種族が存在する。北大陸ローデリアには悪魔、南大陸ネルヴァには精霊、西大陸リヴァインには人間がそれぞれ暮らしている。

彼らは何百年もの間互いのテリトリーを守り生活をしてきた。しかし10年前、新たに魔王となったラザロスは人間を嫌った。

そしてついに戦争を起こした。

悪魔の魔力に人間が適うはずも無く人間は窮地に陥った。そこで人間は精霊と協力することを決めた。

こうして誕生したのが悪魔に対抗できる戦士を育てる養成所。シュヴァリエ学園である。

そこでは多くの人間、精霊が日々厳しい訓練と任務に奮闘している。

そして・・・その中には悪魔混じりの者も少数存在していた。

ここはウォーレ島。リヴァインとネルヴァの間にある島である。この島は若者の割合が多い。なぜなら、ここにはシュヴァリエ学園があるからだ。

青年は学園の前方の街を歩いていた。

青空のように澄んだ瞳、左目の下の泣き黒子、銀髪のサラサラショートヘア。

街で彼を見かけた人々は皆こう思ったことだろう。

美青年。・・・と。

青年は街を歩きながらしゃべっていた。

・・・黒猫と。

黒猫は青年の肩に器用に立っていた。そして、青年と話していた。ちゃんとした言葉で・・・もちろん周りの者たちには気づかれずにだが。

「本当に学園に入学するつもりか？」黒猫が青年に聞いた。

「本当にそのつもりだけど？」と青年は答えた。

黒猫は渋い顔をした。

「旅をやめ、学園に入ってどうするつもりだ？お前の目的はそこで果たせるのか？何よりそこに入ったらお前の正体がバレるかもしれないんだぞ。」

青年は微笑した。

「俺の目的は今よりずっと果たしやすくなると思うよ。学園と俺の目的はほぼ同じはずだからね。正体は・・・まあ、バレるだろうね。いつかは。でも俺と同じような存在は何人かいるみたいだし。なんとかなるよ。」

黒猫は嘆息した。

「まあいい。俺はお前に従い守るだけだ。」

青年はまた微笑しながら「ありがとう」と言った。

そして、今度は冷たい笑みで

「目的のために利用できるものは利用しなくちゃね。レヴァン。君もそう思うだろ？」

青年、ユリウス・オルセンは言った。

彼らは会話を終え、シュヴァリエ学園へ向かって歩き出した。

序章（後書き）

初心者の書いた作品ですので、まともな文章ではないですが読み続けてくださればとても嬉しいです。

第1話 銀髪的青年

今日はこのシュヴァリエ学園に新入生たちが入ってくる。

シュヴァリエ学園には、17歳から入ることができ、クラスは実力でA〜Dに分けられる。

Aクラスが最高位、それからB、CときてDクラスが最下位。

まあ、当たり前といったら当たり前なんだが、Aクラスには精霊が多い。どう考えても人間より強いからな。

たまに武術に長けた人間がAクラスに行く場合もある。

ちなみに実際Dクラスは最下位と言われているが、正直Aクラスと同じかそれ以上の奴はたくさんいる。

Dクラスに入れられるのは、いわゆる悪魔混じりの奴らだ。

奴らは強い。魔力も腕力もけた外れだ。人間もほんの少しだけ魔力がある。だが魔法単体ではとてもじゃないが戦力にならない。だから人間は魔法を補助として使用し、武器や体にさまざまな補助魔法をかけて戦う。

そんでもって、俺はバート・ケイン。Dクラス。

人間と悪魔のクウォーターだ。どちらかという与人間の血のほうが多い。

でもそんなのは関係ない。ここでは少しでも悪魔の血が混じっていれば強制的にDクラスだ。

結局、俺たちみたいな存在は人間様や精霊様はもちろん悪魔にすら嫌われる。

ま、もう慣れたけど。

そこで、こんな事情だから毎年Dクラスに入ってくる奴は極わずか。酷い時はゼロ。

今だってクラスの人数たったの9人。

だから俺は新入生が入ってくる時は楽しみにしてるんだ。

バートは中庭から自分のクラスがある校舎に向かっていた。

校舎は各クラスごとに分けられており、学園の南がAクラス。西がBクラス。東がCクラス。そして北がDクラスになっている。4クラスの中央には共有施設と中庭がある。だが、Dクラスの者たちが共有施設を使うことはほとんどない。

中庭をずんずん突き進んでいるとバートは人間と擦れ違った。

奴らはビビった顔をしながら通り過ぎて行った。俺たちに対する人間や精霊どもの態度は2パターンだ。

今の奴らのように俺たち悪魔混じりを恐れるか、逆に攻撃的に接してくるかのどちらかだ。

正直、俺的には前者の方がまだいい。後者は相手をするのが面倒だ。だからといって無視するのも疲れる。奴らはしつこい。

ちなみに今擦れ違ったのはCクラスの連中だ。

クラスは制服を見れば分かる。Aクラスは白、Bクラスは赤、Cクラスは青、Dクラスは黒色のジャケットをそれぞれ着用している。

黒は悪魔の象徴の色らしい。馬鹿馬鹿しい。

勝手にイライラしていると、後ろから声が聞こえてきた。さっき擦れ違った奴らが何やら話している。

バートは歩みをとめた。話し声に耳を澄ます。結構距離はあるが耳はかなりいいほうだ。

「聞いたか？先週また出たらしいぞ。銀色の悪魔が・・・」

・・・銀色の悪魔？

聞き慣れない言葉を聞いてバートは少し興味を持った。さらに耳を澄ます。

「それ本当か？でもあれって結局ただの噂なんじゃねえの？」

「それが俺の知り合いがこの間この島の近辺に任務に行ったときその銀色の悪魔を見たらしいんだ。なんでも、とんでもない腕力だったそうだ。それで、そいつはうるついてた悪魔を殺してたらしい。」

「え、何そいつ同胞殺し？」

「さあ、でも何回か悪魔を殺してるとこ発見されてるらしい・・・ただその悪魔は呼び名のとおり髪が銀髪だ。普通悪魔は黒髪のはず。」

「

「だったらそいつ悪魔じゃなくて悪魔混じりなんじゃね？」

「そうかもな。でも、悪魔を虫けらのように殺してたらしい。悪魔より強い悪魔混じりなんていたらシャレになんねえな。」

「あんま気にするもんじゃねえよ。どうせ殺された悪魔が弱すぎただけだって。」

「そうだな。」

・・・。。。。。

悪魔を殺し回る悪魔混じり・・・ね。

正直驚いた。悪魔混じりだからそりゃ人間たちよりは強いに決まってる。だが、相手が純粋な悪魔なら話は別だ。

当然奴らの方が腕力も魔力も格段上だ。

俺ら悪魔混じりは一人では悪魔を倒せない。2、3人は同じ仲間が必要だ。

だが、その悪魔混じりかも知れねえ銀色の悪魔とやらは一人で簡単に悪魔を殺した。

こんなすごいことに興味を持つなという方が無理だ。

ぜび、その銀色の悪魔に会ってみたい。そして仲間になりたい。Dクラスは危険な任務ばかりだ。ほとんどが悪魔狩り。

まあ、それはAクラスもだが・・・。

だからこそ、そんな強い奴が仲間になってくれたらありがたい。ま、そんなすげえ奴はこの学園に入る必要無いだろうからまずありえないが。

バートはさっきまでのイライラはどこへ行ったのか・・・軽い足取りでクラスへと向かった。

* * * * *

教室で担任が来るのを待っていたバートは驚いた。心の底から驚いた。

ウソだろ・・・

いつものように眼鏡をかけ、よれよれのスーツ姿をした担任。アンドリュー・バーンズと一緒に教室に入ってきた新入生を見てバートは唖然とした。

いや、バートだけじゃなく、クラスのほとんどが口を開けて固まっていた。

会った瞬間分かった。魔力がけた外れだ。そして銀髪……。

人間はあまり魔力に敏感じゃないが、俺たち悪魔混じりと精霊は魔力にとっても敏感だ。

だから分かった。こいつはただの悪魔混じりなんかじゃないということが。

そんで、俺は疑った。もしかしたらこいつが銀色の悪魔じゃないか？と。

ほとんどのクラスメイトは魔力の強さに固まっていたが、あきらかに女子はそれ以上のことに興味津々だった。

そう、新入生は……かなり美形だった。男の俺がそう思うのに女子が反応しないはずがない。

特に隣に座っているベアトリス・エイリー。紫色の腰まである長い髪に黄金の瞳。色濃く悪魔の血を受け継いでいる彼女は半魔だ。彼女の眼はうざいほどランランに光っている……

ひとつ前に座っている、青い瞳にこげ茶色の髪をウサギのように二つに結んであるオードリー・マクレーン。

彼女は、もじもじしている。後ろから見ている俺がもろ分かるくらいに……

そして最後の女子はレイチエル・アイアンズ。髪は灰色のボブカット。瞳はアメジスト色。

彼女は、無反応。もともとこういうことに興味なし。

もっと無反応なのが、コンラッド・メイスン。黒に近い青色の髪に黄金の瞳。この男は俺と同じクウォーターだ。

いつても俺とは真逆で悪魔より。多分このクラスで最も悪魔に近

い存在だ。

だった。・・・か？

今はさらに悪魔に近そうな奴が目の前にいるからな。

そして、やっと言うべきか。新入生が自己紹介した。
いや、俺の下らん解説が長かっただけか・・・。

例の銀髪美青年は穏やかな笑みで

「今日からこのDクラスにお世話になります。ユリウス・オルセンと申します。ふつつか者ですがよろしくお願いします。」

と言った。

俺の第一印象。かたっ苦しい奴。

なんか1、2枚カベ作ってる感じがした。特にあの穏やかさMAXのほほ笑みが。

さらにその後もずっと絶やさず続けていた穏やかな笑みが俺を無性にイライラさせた。

奴はそれを分かってやっているのだろう。それを証拠にユリウス・オルセンは苛立たしげな俺と目を合わせた時、
ほほ笑んだ。

俺は、本当にこいつと仲間になれるんだろうか・・・
かなり自信がなかった。はつきり言って苦手なタイプだ。

一方、ユリウスはこう思っていた。

仲良さげに近づいてくる人嫌いだけど、ああいう敵対心？反発的な態度の人結構好きだな。うまくやってけそう。

ユリウスは前に向き直り静かにほくそ笑んだ。

その同時刻、窓の近くに生えている木の枝の上に寝そべりながら黒猫レヴァンは飽きた表情をしていた。
そして思った。

ユリのあの顔は、いじりがありそうな相手を見つけた時の顔だと・・・。

第2話 猫の憂鬱と噂の真実

朝、鳥のさえずりでユリウスは目覚めた。窓から外を見ると、鳥たちが戯れている。

彼が今いる部屋は、Dクラス校舎のすぐ裏に建っているDクラス専用の宿舎のある一室。宿舎は各クラスの校舎裏に建てられている。今日から本格的に学生として活動する。といっても今日の予定は訓練のみだが。

（訓練ね・・・面倒だな。やっぱり任務の方が楽しそうだ。悪魔狩りだしね。）

とりあえず身支度を済まそう。そう思ってベットから下りた足元に黒猫が歩み寄ってきた。

「おはよう。レヴァン。」

「ああ。」

レヴァンと呼ばれた黒猫はカシカシと後ろ脚で耳の後ろを掻きながら答えた。

「レヴァン。これから訓練に参加してくるよ。」

「そうか。なら俺は木の上で寝てくる。」

ユリウスは思った。レヴァンの正体がバレるのはまずいが、この猫の姿自体を隠すのは面倒である。

なにせレヴァンは常にユリウスの近くにいる。結局いつかはこの猫は誰かに発見されてしまうのだ。

（・・・なら、いつそのことバラしてしまうか。この猫ちゃん。）

ユリウスは屈んで黒猫と目を合わせた。

「今日は木で寝なくていいよ。俺と一緒に来てもらうから。」

眩しいほど輝く満面の笑みをたたえながらユリウスは黒猫を抱え上げた。

抱え上げられ、体をブラブラさせながらレヴァンは体中の毛がざわつくほど嫌な予感を感じた。

Dクラス校舎の入り口付近にユリウスはいた。そして黒猫も。案の定、レヴアンの予感当たった。

「……最悪だ。」

今、レヴアンは抱かれている。女に。

「ニャンちゃん、君かわいいね〜！毛並みも最高よ〜！」

黒猫を抱き上げ頬ずりしているのはベアトリス・エイリー。

「ベアトさん……次、貸してくださいね……ニャンちゃん……」

「

控えめにもじもじ話している彼女はオードリー・マクレーン。彼女も猫が好きなようだ。

二人の女の子にキャツキャサされているアイドル君はというと、反抗するのも面倒なのかされるがまだ。

（でもね、ニャンちゃん。目が据わっているよ？）

ユリウスが微笑していると、黒猫が黄金の瞳に怒りを滲ませながら睨んできた。

そんなに睨まないでくれよ。これも全ては君のためなんだよ。

ひとしきり楽しんだところで、そろそろ助けてあげようかな。と思ったそのとき。

「お前ら何騒いでんだ。……猫？何でこんなとこに居るんだ？」

宿舎からやってきたのはバート・ケインだ。髪は黒みがかった赤色の少し逆立った短髪。瞳は驚色をしており身長は高く、全体的にガツチリしている。

「ユリウス君が連れてきたのよ」とベアトリスが答えながら再び黒猫に頬ずりをした。

「お腹がすいて倒れていたようなので保護しました。」ユリウスはにつこりほほ笑みながら言った。

その笑みを見たバートは少し顔を引きつらせた。

（ふふ、本当にこの人は良く顔に出るな。こういう素直な人は弄り甲斐があつて楽しい。）

ユリウスの頭の中はバート弄り作戦を思案し始めていた。

その時、ベアトリスが突然「この子の名前どうしようか」と言いだし、黒猫は半目だった目をカッと勢いよく開けた。さすがに名前までは付けられたくないようだ。というかすでに名前なら付いてるしネ。

ベアトリスはいろいろ思案していた。「黒色だからクロちゃん？んゝ何かありきたりすぎる気が・・・目が金色だから、キンちゃん？それともキーちゃん・・・クーちゃん、クッキー・・・」

本人は真面目に考えているようだけど正直酷いな。最初のクロちゃんで止まれば良かったけど、もうレヴァンの顔がヤバイことになってきた。殺気がすごい出てます。

ユリウスはこれ以上は彼女の身が危険と判断した。

「すみません、ベアトリスさん。その猫の名前はレヴァンです。昨日拾った後に俺が付けてしまいました。」

それを聞いてベアトリスは一瞬ガツカリした様子だったが「そうなの。レヴァンちゃんって名前なのね」と納得してくれたようだ。

とうとう我慢の限界が来たらしいレヴァンはジタバタ暴れだした。驚いたベアトリスが腕を緩めた隙に素早く抜け出しユリウスの肩に乗り移った。やっと安全地帯に辿り着いたレヴァンは溜息をついている。

「昨日の今日でずいぶん懐かれているのね」羨ましそうにベアトリスが言った。

オードリーもとても羨ましそうに見ている。バートはと言うと少々飽きれている様子だ。

「ところでオルセン、そいっとうするんだ？その猫の毛色だとこの学園に野放ししておくのはあまり良くないと思うが・・・」バートが言いたいことは分かる。黒は悪魔の象徴とされる色。さらに黄金の瞳も悪魔特有の色。まあ、極一部の悪魔は異なる瞳の色をして

いるけれど。

つまりこのまま放っておけば、この猫ちゃんは学園内の人間や精霊に悲惨な目にあわされるということだ。だが結局、学園の内も外も関係ない。リヴァインやネルヴァに居る以上どこへ行こうと俺たちに対する扱いは変わらない。

「俺が面倒をみるよ。あ、でも宿舍で猫を飼ってはダメかな？」

「別にいいんじゃない。アンドリユー確か猫好きだった気がするし。」「とても楽観的にバートが答えた。

「それいいね！！わたしもレヴァンちゃんにいつでも会えるし！！」「ベアトリスは大賛成といった感じで喜んでいた。オードリーも嬉しそうにしている。ただ一人、いや、一匹？ユリウスの肩の上でこの世の終わりだとも言いたいような顔をしている。

（それにしてもバートはさっきアンドリユーって言ってたけど一応先生のはず。上下関係が無いのかな？まあ、クラスの生徒も年はバラバラだし一々気にしたら面倒だからかな？）

Dクラスの担任アンドリユー・バーンズはDクラス唯一の教師であり、当然、授業・訓練などあらゆる教育を彼一人でこなしている。そして、宿舎には家事一般をこなすソニア・シモンズ（女性）とダニエル・パーカー（男性）の二人だけだ。もちろん三人とも悪魔混じりである。

（思ったよりこの学園は悪魔混じりの扱いが徹底しているな。こんなに嫌われていて俺の目的は果たせるかな。ホント、人間と精霊って面倒くさい）

ユリウスはこれからやらねばならないことと、起きる出来事を思い浮かべ、心の中で大きく溜息をついた。

訓練所に移動するためユリウスたちは中庭を歩いていた。訓練所は、南校舎の隣に設置されており中庭を突っ切るのが一番早い。それにしてもDクラスがここを通ると一気に周りの雰囲気が変わる。恐ろしいのを見るような目、憎悪の目。いつも向けられる視線は同じ

だ。今日も変わらぬ扱いを受けるに決まっていると思って疑わなかったバートだったが、違った。人間の女たちはどこか呆けたような眼をしていた。彼女らの視線を辿っていくと、ユリウス・オルセンに辿り着いた。バートはうんざりしたと同時に飽きた。

（こいつの顔は人間まで有効なのか・・・。）

だが、さすがに見るだけで近づいてきたりはしないようだ。当たり前だな。ここにはオルセン以外も居るし。

と、ふとユリウス・オルセンを見ると彼は微笑んでいた。満足げに（こいつ・・・まさか人間に好意の目を向けられて嬉しいのか・・・??）ありえねえというような視線を向けているバートに気づいたユリウスは、「ああ、違うよ。俺は彼女たちの視線に満足しているんじゃないよ？君たちと行動を共にすることによって彼女らが近寄ってこないことに満足しているんだ。」と不敵に笑った。

（こいつ、外見や口調は穏やかだが中身は真黒だな・・・）バートはユリウスが危険だと瞬時に感じた。

バートはふと、この間の噂話を思い出した。（そういえば、こいつが本当に銀色の悪魔なのか確かめていなかったな・・・聞いてみるか。）

「おい、オルセンお前銀色の悪魔って知ってるか？」

唐突にそんなことを聞かれてユリウスは何の事だか分かっていない様子だ。

「さあ、俺はそんな悪魔のこと聞いたことないですね・・・それがどうしたんです？」

ユリウスは不思議そうに聞き返した。

バートはてっきりユリウス・オルセンが銀色の悪魔だと思っていたため、ガツカリした。

「・・・いや、知らないならいい。」

なんか損した気分になったバートは聞く気が無くなり話を打ち切ろうとしたが、ユリウスはその噂話が気になるようだ。「そっちから

話を振っておいてそれはないでしょう？で、その悪魔は一体何なんですか。」

バートは一度溜息を付き話し始めた。

「俺は実際に見たことはないが、人間たちが噂してるのを聞いて知ったんだ。なんでもここの学園の生徒が外に任務へ出かけた時に目撃したらしいが、銀色の髪をした奴がいきなり悪魔を殺したらしい。生徒たちはそいつが黒髪ではなく銀髪だったことから悪魔混じりじゃないかと言っていたが、そんなはずない。純粹な悪魔相手に悪魔混じりが一人で適うわけがないからな。」そう考えるとやっぱり奴は混じりでなく本物の悪魔か？だがそれじゃただの同族殺し。しかも近くには目撃していた人間がいたんだぞ。普通はそっちを殺すだろ……

話し終わって、一人で悶々と考えにふけっていると、唐突にユリウスが言った。

「ああー……それ、もしかしたら俺のことかもしれない。」

「……はあッ！！」バートはこいつ何言ってるんだという顔をしている。

「いやー、そんな『銀色の悪魔』なんて名前が付いてたなんて知らなかったから始めは何言ってるのか分からなかったけどね。」ユリウスは呆気ランと言い放つ。

「……だがお前、本当に悪魔殺したのか？一人で？」

「俺、この学園に来る前は旅をしていたんだよ。その途中で出会った悪魔のことだねきつと。そいつはね、殺されるだけのことをやった。そして俺の目的のために殺したんだ。」バートの問いにユリウスは淡々と答えた。

（目的……？）「その悪魔、一体何したんだ？」

ユリウスは笑った。「人間の街を焼いたんだよ。」

バートは一瞬ユリウスが何を言ったか理解できなかった。

「焼いた？街を？丸々……？戦争中だからか？」

「まあそうだろうね。きつと魔王に命じられた。ただそれだけだと

思うよ。わざわざそんな危険なこと自分の感情だけではやらないでしょう。」

ユリウスの話聞いていたバートは不思議に思った。なぜなら・・・

「なんで人間の街を焼かれたからってその悪魔を殺したのか。そう言いたいんでしょう？」

ユリウスはニツコリ笑った。「俺は人間のために悪魔を殺したんじゃない。そんな面倒なことはしないよ。ただその悪魔が魔王の差し金だったから。理由はそれだけだよ。」ユリウスは冷めきった目で言い放った。

（魔王の仕業だったから？ならこいつの目的は魔王？でもなぜ・・・まあ俺たち悪魔混じりは同じ悪魔混じり以外は全て憎いと思ってる奴は多いが、こいつは何でそこまで魔王を？人間より精霊より魔王？）

考えにふけっているバートをおいてユリウスは他のみんなと訓練場へ向かう。

「あッ！おい、待てよオルセン！！」皆を追いかけてバートは走った。

第3話 精霊現る

ユリウス達は訓練所に着いた。訓練所では武芸だけでなく魔法の練習もするため周りに被害が及ばないようにバリアが貼られている。

そして訓練所自体はとても広いのだが、Dクラス陣地の狭いこと・
・ABCそれぞれ同じ広さなのに比べて俺たちの訓練場はその3分の1程度。ユリウスは溜息をついた。

（みんなよくこの状態に耐えているな。まあこれくらい耐えれなきゃ今まで生きてこれなかっただろうが。この学園に居れば寝床くらいは確保できる。外の世界では寝床すらまともに与えられない。特に外見に悪魔の特徴がある者はね。）

とりあえず自分達の訓練場所に辿り着いたユリウスは悩んだ。訓練といっても何をすればいいんだろうか。

「バート、いつもは皆どんな訓練をしてるんだい？」

バートは「あゝ・・・」と言いながら「特に決まってない。何か練習する奴もいれば寝てるやつもいる。」

と答えた。ここはやる気のない者が多いようだ。まあ元々實力はあるだろうが。

そうだなあ、やることもないし寝ようかな。そんなことを思っていた時。突然大きな罵声が聞こえてきた。

「おい！悪魔混じりッ！！お前人間様にぶつかっておきながら無視するんじゃないえッ！！！」

叫んでいるのはBクラスの人間の男だ。そして相手はオードリー・マクレーン。彼女は半泣きでオロオロするばかり。少しは謝るなり反抗するなりすればいいのにその反応は相手をイラつかせるだけだ。ユリウスは気にせず寝ようと木の下に移動した。が、うるさい。これではこっちがイラついて眠れない。いつまでもギャーギャーうるさい男をさっさと黙らせようとユリウスはBクラスの男とオードリーの居るところに向かった。

バートは二人のところに向かうユリウスを見て、驚いた。

（あんなのほかつときゃいいのに。いつものことだし、でもあいつなんだかんだで良く助けるよなあ・・・猫拾ってきたりとか？）あいつ本当は本当に優しいのか？などと思っているバートは何も分かっていない。ユリウスはただ安眠妨害の根源を排除しに行くだけだった。

「ねえ、その君。静かにしてくれないかな睡眠の邪魔なんだけど。」

唐突にそんなことを言われたBクラス男子。怒りは未だに収まっていないようだ。

「ああツツ！！ウツセーなお前！悪魔混じりが話しかけんじゃねえ！！！」

「何？じゃあ何で君はその子にわざわざ話しかけているの？無視すればいいだけのことなのに。」

「こいつは違う。今説教してやってんだよ自分の立場をわきまえろってなッ！」

ああ、こいつ嫌いだ。ただの馬鹿としか思えない。自分の怒りぶつけているだけで全然説教になってないしね。こういう馬鹿は力で圧倒するのが一番早い。

「じゃあ君も立場わきまえたら？」

「何で俺がッ！！・・・生意気な奴だな。見た事ねえが新入生か。お前もたっぷり説教してやるからそこで待ってるッ！！まずはこの悪魔女だ」

男がそう言った瞬間ユリウスは男の喉を片手で掴んでいた。

「ホント馬鹿な人だね。説教？笑わせる」ユリウスは微笑んだ。それは、残酷なまでに無慈悲な微笑みであった。

「俺たちは君なんかに説教される必要もない。それより君の方がよっぽど説教が必要だよ。いや、教育かな？感謝してほしいよ。俺が

直々に君の体に教え込んであげるんだからね。」

そう言つてユリウスはさらに指に力を入れ、男の喉をメキメキと締め付けた。男は口から唾液を垂らし、もう声も上げられない様子でただもがくばかり。やがてその動作も無くなりつつあった。さすがに殺すつもりはないのでユリウスは息の根を止める寸前で男の喉から手を離した。

手を放された男は倒れ、咳き込みながら、懸命に空気を求めて荒々しく呼吸をしている。ユリウスはそんな無様な男を見降ろし、さらにお追い打ちをかける。

「俺、言つたよね？立場をわきまえろつて。弱者は強者に逆らつてはダメなんだよ？そして君はあまりに弱い。そんな君が説教なんて馬鹿なことしている暇があるの？その無駄な時間をもつと有効に使うことをお勧めするよ。・・・俺の言つてる意味分かるかな？」

男は何も言わない。ただ怒りと憎悪、たぶん羞恥心も混ざっているだろう瞳でユリウスを睨み続けている。

「もっと真面目に訓練に励み出直してこいという意味だ」

答えたのは、もちろんBクラスの男ではない。ユリウスは声のした方を見た。そこには精霊の男が優雅に佇んでいる。その精霊はシルフだった。シルフとは風の精霊のことだ。真つ白な肌に色素の薄い髪、尖った耳、そして天使のような翼が特徴である。精霊はシルフ以外にもいる。水の精霊ウンディーネ、火の精霊サラマンダー、地の精霊ノームの4種が精霊である。ちなみに悪魔の中にも種族があり、魔族、獣族、亜人族がいる。魔族は悪魔の中で一番数が多く、外見は目や髪の色以外は人間と全く変わらない。悪魔の中で一番魔力も知能も高い。獣族は外見は獣そのものだが、ちゃんと言葉を話す。悪魔の中では最も力に長けているが魔力と知能は最下位である。そして、亜人族は魔族と獣族のハーフである。

精霊の男はこちらに近づいてきた。精霊は薄い黄色の髪に、緑色の

切れ長の目、尖った耳に白い翼が背にある。彼はまだ地面にへばり付いている男を一瞥すると、「いつまでそこに居るつもりだ。目障りだ、さっさと消えろ」と、かなりキツイ口調と冷徹な眼差しで男に言い放った。男は怯えながら、よろよると人ごみの中へと消えていった。

（このシルフ男、俺より言うことキツイな。俺はここまで直球には言わないように気をつけているけどネ）

ユリウスは思っていることをそのまま言ったりしないが、心の中は精霊の男と同じかそれより酷い事を言っている。彼の腹の中は真黒なのだ。

精霊はユリウスに向き直った。「俺の名はエリ阿斯。お前は？」

ユリウスは少し驚いた。彼だけではなく、そばにいたオードリーや周りにいた悪魔混じり、野次馬の人間たち皆が驚いた。本来、精霊は悪魔を嫌う。それは人間がこの世界アルメトロに誕生するよりも前からのことらしく、現在でも彼らは本能的に相手に嫌悪感を感じるらしい。

だから精霊エリ阿斯が悪魔混じりであるユリウスに己の名を名乗りさらに名を聞いてくるなどかなり珍しい事なのだ。ユリウスは相手の真意は分からないが、相手が名乗っているのに自分が名乗らないのは失礼だと思い答えた。

「俺はユリウス・オルセン」

「オルセンか、お前は強いな。今感じる魔力もかなりの物だがおそろく、それはほんの一部に過ぎないのだろう？お前が何者なのかは別に追求するつもりは無いが、その強さは気に入った。是非戦ってみたいものだ。」

エリ阿斯はただ純粹にユリウスの強さを感じ戦ってみたいと思っただけのようだ。

だが、まさか今の魔力が実力の全てではないことが見破れるとは思わず、ユリウスは驚いた。と同時に少し嬉しくもあった。ユリウスの本当の魔力の存在が分かるということは、このエリ阿斯という男

も相当の実力の持ち主ということだ。さらにユリウスの正体も別に追及しないという。ユリウスもそんな彼を気に入った。

「じゃあ、今から試してみる？」冗談で言ってみた。

「嬉しい誘いだが、今は遠慮しておこう。ここで戦ったら周りの者に被害が及ぶ。それにこの学園では生徒同士の戦いは訓練のレベルで行ってはいけないことになっているからな。破ったら罰せられるぞ。」

そうなのか。それは知らなかった。まあ、さっきの男とのいざこざくらいは許される範囲だろう。別に戦ってたワケじゃないし。これからは気をつけよう。

「残念だなー。久しぶりに骨のある相手と戦えたかもしれないのに」ユリウスはウソっぽい口調で言った。正直、あまり戦いたくはない。相手が弱いなら問題ないが、この精霊のように今、表に出している魔力だけでは少々キツイ相手だと本気を出し兼ねない。本気を出したら俺の正体がバレてしまうからね……。

とりあえず、今はまだ正体を明かすわけにはいかないので、避けれる争いは徹底的に避けなければ。と思っていたユリウスだが、そう簡単にはいかない世の中だった。

「2ヶ月後の試合を楽しみにしている」

そう言つて、エリ阿斯は「ではな」と踵を返して歩き去ってしまった。

・・・は？2ヶ月後の試合？何のことだ・・・？ユリウスはすぐ後ろにいたオードリーに尋ねた。

「2ヶ月後の試合って何のことかな？」

オードリーはおどおどしながら「こ、この学園では・・・2か月ごとにクラス対抗の試合が行われるんです・・・その試合で良い成績が出せれば、クラスを上がることもできる・・・そうです。」何てことだ。そんな落とし穴があったとは。いや、しかし・・・

「ねえ、クラスが上がるってことは、俺たち悪魔混じりさん達は何をしたってDクラスなんだから関係ないよね？」ユリウスはニッコリほほ笑んで尋ねた。

「あ・・・いえ、その・・・全員強制参加・・・です・・・」

俺は「関係ないです」って言葉が聞きたかったんだけどなあ。ユリウスは溜息をついた。

「別に面倒臭いなら負ければいいだけだぜ？俺らは大抵そうしてる。勝ち続けたって何の得にもなりやしねえし。体力の無駄だ。」と、近づいて来たバートが言った。

そうか、その通りだ。わざわざ悪魔混じりたちに勝たせたって何もない。本気を出さなくなたって何も言われない。逆に人間にとってはその方が好都合のはず。

ユリウスは安心した。当分は正体はバレなくて済む。いつかは明かさなければいけないが。

「それよりお前、あいつに気に入られるなんてどんなけすげーんだ・・・」

「あいつって、エリアスの事かい？知ってる人？」

「ああ。まあ、お前も制服で分かっていただろうが奴はAクラスだ」「それは分かってたけどね」

そもそもユリウスの力に気づいたんだAクラスでないとおかしい。

「奴はAクラスの中でも上位のレベルだ。だから奴のことを知らないのは新入生くらいってこと」

「そうなの」

「そんな奴にお前が気に入られたことが物凄く気になるが・・・聞かないのが身のためか？」

「その通りだね。あまり聞かないことをお勧めするよ」

バートは分かっている。悪魔混じりは皆事情が複雑なのだ。だから彼らはお互いの事を深く聞かない。

試合の事は誤算だったが、とりあえずこの学園も雑魚ばかりではないことが分かりユリウスは少し安心した。バートはエリアスの事を

Aクラスの上位と言った。ということは、彼以外にも強い人材は存在するということだ。

（利用できるものは多いに越したことは無いからネ）ユリウスはほくそ笑んだ。

そしてユリウスはその後、訓練をせず木の陰で寝ていた。それはユリウスだけでなくDクラスのほとんどが、であつたが。だが、二人だけ寝ていなかった。ベアトリスとオードリーだ。彼女らはただべつちやくつていただけ。ついでに訓練にすら来ていない者もいた。本当にまとまりのない集団だ。まあ、彼らは集団行動は苦手だろう。今まできつと孤独の中で生きてきたのだ。それは多分今も変わらない。

そして俺自身もこの雰囲気の方が落ち着く。人間みたいに群がるのは嫌いだ。あいつらの上辺だけの仲良しごっこが気持ち悪くてしょうがない。俺の外見は悪魔混じりには見えにくく、よく人間に人間と間違われる。だが、彼らはどんなに向こうから仲良く近づいてこようと、こつちが少しでも悪魔混じりの素振りを見せると人が変わったように攻撃してくる。あの扱いの変わりようには吐き気がする。ほんと、人間はくだらない生き物だ。と思いながらユリウスは眠りに就いた。

第4話 アンドリユー先生

時刻は昼過ぎ。黒猫レヴァンは宿舍のリビングにある一番日当たりの良いソファアの上に寝そべっていた。ユリウスたち生徒は訓練に行っている為この宿舍には家事を担当しているソニアとダニエルしかいない。二人はレヴァンをこの宿舍で飼うと既に生徒たちから聞いている為レヴァンは何も気にしないでくつろげる。この時間だけは。奴らが帰ってきたら天国は終わり、長い地獄が始まってしまう。タイミングを見誤らず一瞬でユリウスの部屋へ駆け込むことが、最近レヴァンの日課である。

今日も同様の事が起こると確信していたレヴァンは突然の訪問者に警戒した。まだ彼らの帰ってくる時間帯ではない。足音が一つ、この宿舍の扉に近づいてきた。生徒ではない。この宿舍で会ったことのある者の足音と気配はもう記憶している。しかし……（なんだ？この無駄のない感じは……こいつ、相当の手足れた。それにこの魔力、悪魔にかなり近い……ユーリ以外にここまで悪魔に近い魔力を持つ奴がこの学園に居たか？）

レヴァンはさらに警戒し、扉の開く瞬間を凝視していた。扉から顔を覗かせた人物をレヴァンは見たことがあった。アンドリユー・バインズだ。Dクラス教師の。レヴァンは彼を一度しか見ていない。ユリウスが新人生としてこの学園に入り、Dクラスの生徒たちに挨拶をしていた時、窓の外から見たただけだ。その時はこんな魔力は一切感じなかった。だが、今感じる魔力は紛れもなく本物。ということとは奴は普段魔力を隠していることになる。何の為に？

アンドリユーはソファアの上で毛を逆立て警戒心丸出しの黒猫に気づいた。彼は首を傾げる。

「はて……、黒猫さんがなぜこんな所に居るんでしょうか？」
アンドリユーは生徒からレヴァンの事を聞かされていないようだ。そこへ洗濯を終えた様子のソニアがリビングへやって来た。

「あら、アンドリユー先生。どうなさったのです？今は訓練の時間では？」

近づいて来たソニアにアンドリユーは困り果てた顔を向ける。

「ああ、ソニアさん。コンラッド君を知りませんか？」

その言葉を聞いたソニアは溜息をつく。

「あの子は・・・またおサボリですか。見かけてはいませんが探してみます。」

アンドリユーは微笑しながら「見つけたら叱っておいてください」と言った。そしてまた黒猫に目を向ける。

「それよりソニアさん、いつの間に猫を飼ったんですか？」

「その子はユリウス君が拾って来て、皆さんの同意でこの宿舎で暮らすことになったんです。名前はレヴァンちゃんだそうですよ」

それを聞いたアンドリユーは何故か少し驚いた顔をした。「レヴァン・・・ですか？本当に？」

名前なんかをわざわざ聞き返してきたアンドリユーを不思議に思っていたソニアだったが、「ええ、ユリウス君が名付けたそうですよ」と答える。

それを聞いてアンドリユーはさらに腑に落ちないというような表情をした。と思つたら、突然黒猫を引つ摺んだ。当然、黒猫はビックリし、暴れだしたがアンドリユーはそんなことは気にせず、ソニアに「この猫しばらくお借りします」と言い残し、宿舎から出て行ってしまった。ソニアは何事かと思い、しばらくその場に立ち止まっていた。

宿舎の裏、木々が鬱蒼と生えている場所に来たアンドリユーは掴んでいた猫を下ろす。猫は体中の毛を逆立てアンドリユーを警戒している。そんな猫に彼はしゃがんでさらに顔を近づけた。猫をじ・・・と凝視するアンドリユー。

レヴァンは警戒しつつもクエッション(?)マークを頭の周りに飛

ばしていた。

（何だこいつ。何がしたいんだ・・・俺に用なのか？猫に・・・？ただの変人か？）

そんなことを考えていたレヴァンにアンドリユーは唐突に言った。

「君は・・・本物の猫なのかい？違うでしょ」

レヴァンは驚いた。そして焦る。（なぜ本物の猫でない事が分かったんだ？姿はどこをどう見ようと猫そのままだ。当然魔力も完全に隠している。黒色の毛を見て不吉と思う奴はいるが、猫であることを否定されるとは思っていなかった。）レヴァンは、ますますこの男が何者なのか確かめる必要があった。ユーリのこれからの計画にも関わることだ。慎重に事を運ばねば。黙っている黒猫にアンドリユーはさらに話しかける。

「レヴァン。君、本当は悪魔じゃないのかい？」

レヴァンはつい、ビクツとしてしまった。（こいつ本当に何者なんだ！！）

アンドリユーはレヴァンの一瞬の反応を見逃さなかった。そして確信した顔をしている。

「レヴァン。君はこんな所で何をしているんだ。君はそんなに人間と精霊が好きだったかい？僕はずっとその真逆だと思っていたが・・・」

アンドリユーは何が可笑しいのか笑っていた。その笑い顔・・・見覚えがある。だが、姿は全く見覚えがなかった。

「まだ気付かないかい？レヴァン。僕だよ。ミハエルだ」

レヴァンは啞然とした。（ミハエルだと！！なぜこいつが・・・）ミハエルとはレヴァンの昔からの知り合いだ。いわば腐れ縁の仲。そして当然彼、ミハエルも真正銘悪魔なのだが、そんな彼がこの地で何をしているというのだ。

「ミハエル、お前こそこんな所で何をしているんだ」

「何って、先生だけど？君こそ何で猫・・・ぷッ・・・」ミハエルは吹き出した。

「何が可笑しい」

「いや・・・可愛いよね。猫って・・・」肩を震わせ笑いを堪えるミハエル。

その反応に苛々するレヴァン。「ちゃんと質問に答えろ。お前は何をここにへ来たんだ。髪の色を変え、変装までして」

確かに、ミハエルの黒髪は焦げ茶色に染められており、瞳も少し黄金色がくすんだ色になっている。

「ん」。正確に言えば、機会をうかがうため・・・かな？」

「何の機会だ」

「あいつを殺す機会」

「あいつ？誰だ」

「何言ってるんだい。僕の殺したい相手なんて一人しかいないだろうに。君もあいつを殺したいと思うだろう？」

俺も殺したい相手・・・

「ラザロスか」

「その通り。あいつは僕と君の大切な人を殺した。その報いは受けてもらわないと。それに、あいつが死なない限り僕たちは故郷へは戻れない」

「・・・奴を殺したいことは分かった。が、僕たちとは何だ」

ミハエルは溜息をついた。「現魔王ラザロスの傍に前魔王の配下だった者が居られるわけないだろう。ましてや自分の殺した相手の配下だ。当然、故郷では僕を含め多くの者がお尋ね者だ。だから僕は彼らとリヴァインに逃亡してきた。だが、大量の悪魔がリヴァインに居ると人間にバレればそれこそ命に危険が迫る。だから逃亡してきた悪魔たちはリヴァインを散り散りに散らばり生活しているんだ。ちなみに、ソニアとダニエルもね」

・・・そうか、前魔王を崇拝する者たちはこちらに逃げてきているのか。それならば、もしかしたら彼らはユーリに協力してくれるかもしれない。

一人、悶々と考え込んでいるレヴァンにミハエルは「で、君は？結

局初めに質問した僕がその答えを聞けていないんだけど？」

レヴァンは迷った。言うべきか・・・真実を。ミハエルに真実を打ち明けることは別に俺自身は構わない。むしろ知ってもらった方が今後動きやすい。だが、ユーリがそれを望むのかはまだ分からない。やはり本人がいないところで話すことはない。と思ったレヴァンは「ユーリを呼んで来い。話はそれからだ」

「やっぱリウリス君が関係しているんだね。君の名前も知っているみたいだし。分かった、彼を連れて来るよ」

そう言ってミハエルは訓練場へ向かった。

ミハエルは中庭を歩きながらリウリスと初めて会った時の事を思い出していた。

彼に会った時、何故か懐かしい気がした。とても親しみのある感覚・・・そして、彼の魔力にとっても惹かれた。ミハエルは一つの仮説を思い浮かべた。が、そんな訳はない。と思い直し、歩き続ける。

訓練場に着いたミハエルはすぐにリウリスを見つけた。彼は良く目立つ。整いすぎた容姿、そしてなによりあの銀髪の美しさに誰もが見入っている。こうして眺めていると彼が悪魔の血を引いているとはとても思えないが、魔力は本物だ。それもケタ外れ。見た目にも当然目を引くが、何よりミハエルの心を捉えるのはリウリスの雰囲気。彼に似ていることだった。

リウリス・オルセン・・・君はなぜ彼を・・・アレクシスを思い起こさせるのかな・・・。

ミハエルはリウリスに向かって歩き出した。

第5話 彼らの推測

雲一つない、どこまでも広がる青い空のもと、ユリウスは訓練場にいた。今はバートと組み手をしている。二人は凄まじい速さで攻防を繰り返していた。隣で訓練をしているCクラスの生徒は、自分の訓練も忘れて二人の組み手に見入っている。

バートはユリウスの放ってきた拳を左手で受け止め、右手でストリートを撃つ。ユリウスはバートの攻撃をかわしながら、ぐんつと一気にしゃがみ込み右足でバートの足を払った。バランスを崩したバートは仰向けで倒れながらも下から蹴り上げる。ユリウスは顎にヒットする筈の蹴りをすんでの処で後ろに飛びのいてかわした。

「はは。強いね、バート」ユリウスはにこにこ笑いながら言う。彼は全く息を乱していない。

「世辞はやめろ。全然思ってもねえこと言われると気持ちわりーんだよ」バートは少々呼吸を乱しながら言う。

「そんな事ないよ？俺にここまでついて来る相手は久しぶりだ。君は下手な悪魔より全然強い」ユリウスは思ったままを言った。

「……誉めてるつもりか？貶してるだけだろ。悪魔混じりの俺が悪魔より強いわけがねえ」

ユリウスは肩をすくめながら、「悪魔にも色々居るんだよ。全ての悪魔が戦えるわけじゃないからね」と言う。

「……それは非戦闘員の悪魔と変わらないということか？バートは顔を引きつらせ溜息をつく。

そんなバートを見て楽しんでるユリウスのもとに教師のアンドリユー・バーンズがやって来た。彼はあまり訓練を見に来ない。教える立場のくせに、ユリウスはここへ来てまだ一度も彼が生徒に教えている姿を見ていない。この教師は何の為に居るんだろうか。確かにDクラスの生徒は元々戦闘能力は高い。だが、しっかり指導しなければ、これでは宝の持ち腐れだ。今バートと手合わせしたが、動

きにかんりの隙と無駄がある。きつと自己流の練習をしてきたのだろう。彼はもつと強くなる。が、環境の問題だ。他の生徒もきつと専門の者に教われれば、武術も魔術も格段にレベルアップする筈だ。ユリウスとしてもこの学園生徒全員が強くなってもらわないと困る。生半可な戦力で奴は殺せない。

「ユリウス君。少し話したいことがあるんだ。宿舍まで一緒に来てくれないかな」アンドリユーは唐突にそう言ってきた。

（いきなりだな。しかも、ここでは話せないような内容・・・俺、何かしたかな？——あまり考えたくないけど、もしかして正体がバレたとか・・・）とりあえず、一緒に行くしかないようだ。

「分かりました」

アンドリユーは頷き、他のDクラスメンバーには訓練を続けるように言い残した。

ユリウスとアンドリユーが宿舍の方に行ってしまった。

「なんだ？アンドリユーの奴、練習の邪魔しやがって。しかもちやつかり練習相手奪っていきやがった」不満そうにバートが言う。

「練習つて・・・全然相手にされてなかったけどね」ただ遊ばれてただけでしょ」くすくす笑いながらバートに話しかけたのはラルスだった。

「だめだよ・・・そんなこと言っちゃ。バートも頑張ったんだよ。相手にされてなくても・・・」控えめな声でラルスの言葉を否定しながらもラルスの言葉を繰り返したルイス。

彼らは双子の兄弟だ。兄のラルスに弟のルイス。二人とも髪は明るい栗色、瞳は青色をしている。今の外見だと悪魔には見えないが、彼らはしっかり隠しているのだ。帽子やフードで頭に生えているふさふさの三角形の耳を。二人は亜人族の血を引いている。彼らのように亜人族や獣族の血を引く者の扱いは魔族の血を引く者より悲惨

なものだ。人間は異なる者を受け入れられない。魔族より獣族や亜人族の方が人間との姿、形の違いが大きい。最悪の場合、この双子のような存在は生まれた瞬間殺されてしまう。では、彼ら人間はなぜ姿かたちの異なる精霊を受け入れるのか。理由はよく分からないが人間は精霊を神の使者とも思っているのではないだろうか。彼らは神々しい者に弱い。

バートはこの双子が今までどれ程の苦痛を味わってきたのだろうかと考えた。が、簡単に想像できてしまった為、思考を止める。

この学園に居れば、まず簡単に命を狙われることはない。蔑まれることはあっても……。だが、この双子は運が良かったのだ。運がなければ、そもそも生まれた瞬間に殺されていた。そんな彼らは今の学園に居る。ここには同じような仲間もいる。個性はそれぞれ強いが、それなりに仲良くやっているとと思う。

バートはラルスの頭の左右をグーでぐりぐりした。

「いっただだだだだッーーーーー！！止めるッ！！いきなり何すんだよッ」ラルスは半泣き状態でバートの腕を振り払う。

「舐めた口きくからだ。俺だって奴との力の差くらい分かってる。

おそらく俺たちが束になって掛つても奴は飄々としてるだろうよ」

「まあ、確かに。マジであいつ何者何だ？」首を傾けながらラルスは言う。

「実は本物の悪魔だとか……。？」ルイスがラルスの疑問になんとなく答える。

「……………それだッッ！！」ラルスは突然叫びだした。ルイスは「…………え？」と呆ける。

「そうだよ。きっとそれだ！実は悪魔でしたってやつなんだよッ」

「アホか。外見が悪魔と全然違うじゃねえか」興奮するラルスにバートが言い放つ。

「そんな俺たちみたいに隠せば済む話じゃん。ユリウスなら、髪

の毛染めたりとかさ」

「……その通りだ。隠してしまえばいいだけだ。だが、本当に悪魔だとしてもそれだけでは解決しないほど奴は強すぎる。今までの任務で戦ってきた悪魔とは全く違う。奴には何かある……」

「あッ！きつと隠密行動とかいうやつなんじゃないッ！！魔王に命じられて中から攻める的なさッ」

「ラルスッ！そんな事大きな声で言っちゃダメだよ！周りに聞こえたらマズいよ！」

興奮するラルスをルイスが止めようとする。

バートはラルスの言葉を聞き、（そう、普通ならそう考えた方が当たりだろう。魔王の手先。だが……）

「奴、オルセンはこの学園に来る前旅をしていたそうだ。そして魔王の手先を殺してたらしい」

「えッ！ユリウス魔王の敵なの！じゃあ、隠密ではない？」ラルスは分からないといった感じに唸る。

「……一応だけど、この学園の敵は最終的に魔王……だよね？」ルイスのなんとなくのこの言葉。

バートはハッとした。……それだ。なんでこんな簡単なことに気づかなかったんだ。

（まあ、俺たちにとっては別に悪魔が敵だとかそういう感情は無かったせいだろう。俺は生きるためにこの学園に居るだけであって悪魔との戦争なんてほとんど気にしたことがなかったな。）

ただ生活のために任務を遂行する。それだけだった。

「この学園に入れば敵に近づける可能性も高く、かつ仲間もいる。いくら強いからといって敵の本拠地にたった一人で行けたとしても無事に済むとは思えない。ましてや相手は魔王だ……」

ユリウスがこの学園に来た理由は考えられるとしたらこれだろう。

だが魔王を狙う理由……

「きつと復讐だね。というか、その理由しか殺すことってないでしょ。戦争で対峙しない限りね」

ラルスはバートの考えていることなどお見通しというような顔で満足げに言った。その顔を見てちよつとムカついてしまったバート。
「んゝゝゝでも誰の復讐だろうね？こればかりは本人に聞かないね」とラルスは言う。

確かに、本人に聞くしかない。だが、俺はそれを絶対にしない。過去を聞くことは相手を傷つけるだけだ。特に俺らやオルセンの過去は簡単に話せるような内容ではないだろう。

「ラルスゝゝ本人に聞くことだけは止めて」ルイスが悲しそうな顔で言う。

「何でだよ。本人に聞いた方が手っ取り早いじゃん」ラルスは不満そうに言った。

ラルスは何も分かっていない。

「馬鹿野郎。お前、自分の過去聞かれて話そうと思うか？」バートは真剣な表情でラルスに言った。

そしてラルスはハツとした表情になる。

「ゝゝゝゝ思わない。だって、嫌な思い出ししかないしゝゝゝゝ」ラルスはシュンとした様子で答える。

「オルセンも多分お前と同じだ。過去は聞かれないだろう。それに、そんなこと聞く必要ねえだろ？俺たちにはここに寢床があるんで、同じ境遇の仲間もいる。それだけで十分だろ？」バートはラルスの頭にポンと手を置いて言う。

ラルスはうんと頷いた。ルイスも満足したように微笑む。

そう。俺たちはたったこれだけの事で満足なんだ。寢床があり、仲間がいる。俺には復讐する相手すら分らない。人間を憎むべきなのか、精霊を憎むべきなのか、それとも悪魔を憎むべきなのかゝゝ

ただはつきりしていることは、悪魔混じりは皆仲間だということだけだ。だから俺は仲間を大切にしたい。Dクラスの仲間は家族みたいなもんだ。オルセンももうDクラスの一員、仲良くやっていきたいとは思う。彼がそれを望めばの話だが。

その後、彼らは再び訓練開始していた。

ちなみに、彼らが色々と想像していたことの半分位は当たっていたのである。

第6話 明かされた真実

ユリウスは宿舎に着いた。アンドリユーが先に入っていていき、ユリウスも彼の後に続く。中に入ったアンドリユーは「やあ、連れて来たよ」と誰かに話しかけた。その相手を見てユリウスは驚く。アンドリユーが話しかけたのは黒猫姿のレヴァンだった。

（どうということだ？先生が猫に話しかける趣味を持っているとは考えにくい……彼はレヴァンの正体を知っているということか……？）

状況を把握できないユリウスはレヴァンへと視線を向ける。レヴァンはユリウスに大丈夫だという視線を返しながら頷いた。レヴァンが大丈夫と言うなら大丈夫なのだろう。レヴァンを信じたユリウスは、まずソファアに腰掛けた。ユリウスの向かい側にアンドリユーも腰掛け、その両隣りにソニアとダニエルが立つ。レヴァンはユリウスの傍らに座った。

（……ソニアさんとダニエルさんまで関係ある話なのか？）さらに不思議に思いユリウスは思考を巡らせていたが、レヴァンが話し始めた為打ち切った。

「まず始めにユーリに言っておくことがある」
「何？」

「そのアンドリユーと名乗っている奴は悪魔だ。本名はミハエル……俺の昔からの知り合いだ」

ユリウスは特に驚いた様子は見せなかった。

（……先生が悪魔……ね。妙に魔力が大きいと思ってたらそういうことか。だが、なぜ悪魔がこの学園で教師をしている？）
「先生が悪魔だと言うなら、なぜこの学園に居るんですか」

「ユリウス君、僕も疑問を持っていてね。なぜ君が悪魔であるレヴァンと行動を共にしているのか。君はいったい何者なんだい？」

ユリウスの質問にアンドリユーもといミハエルは質問で返してきた。

・・・この先生。ではなく、ミハエルと言う男は、俺の一番嫌いな人種だ。勿論、ただの馬鹿も嫌いだが、まあ、馬鹿は使いようってね。

ミハエルのように相手の腹の内を探る奴は、扱いが面倒臭くて嫌なんだよ。俺は扱いやすい奴が大好きだからね。

まあ、彼のそんな性格が自分自身のようで嫌いなかもしれないけど？

とにかく、いつまでも腹の探り合いをしている訳にもいかないだろう。

面倒臭いのでユリウスは先に折れることにした。

「レヴァン。俺にこのミハエルさんと言う人を紹介したということは、君にとって信用できる相手なんだね？」ユリウスは隣に座るレヴァンに確認のため聞いた。

レヴァンは真っ直ぐユリウスの目を見て答えた。

「ああ。奴なら大丈夫だ。仮にも元魔王の臣下だった男だからな」それを聞いてユリウスは、なるほどと思った。だが、そんなユリウスとは逆にミハエルは怪訝な表情をしている。ソニアとダニエルも同じような顔をしていた。

「レヴァン。なぜそんなこと彼に言う必要があるんだい？」

ミハエルは警戒している。無理もない。彼の素性はこの大陸では決してバレてはいけないのだから。人間や精霊にバレたら終わりだ。レヴァンは「すぐに分かる」とだけ言った。ユリウスは周りが落ちて着いてきたところを見計らって話し始める。

「俺が何者なのか、でしたね。俺は元魔王アレクシスの実の息子。そしてレヴァンは父の元従者であり、今現在は俺の従者です。」

・・・

ミハエル、ソニア、ダニエルの3人は驚愕の表情をする。少しの沈

黙の後、始めに口を開いたのはミハエルだった。

「……見たところ、ユリウス君は悪魔混じりだよね？なら、それはありえない。……レヴァンが言ったように僕は彼の臣下だったんだ。人間たちの大陸に行っていたなら、それに僕が気づかないはずがない」

「その通りですわ。私もアレクシス様のお世話しておりましたが、そんな素振り一度も見えていません……。ダニエル、見たことあります？」

「いいえ……。」

3人とも否定する。だが、これは事実であって今さらどうすることもできない。信じてもらうしかないのだ。

「お前たちがいくら否定しようと、これは事実だ。それに、アレクの力ならお前らの目を欺くくらい簡単だろう。仮にもあいつは魔王だったんだ」と、レヴァンは3人に言い放ち、3人は苦い顔をする。

「……なぜ僕らに子供の存在を隠す必要があるんだい？それに、アレクがユリウス君を隠していたならレヴァンはどうやって彼の事を知ったんだい？」ミハエルはレヴァンに聞いた。だした。

「……ミハエル、お前、聞かなくても分かっているだろ。ユーリは悪魔と人間の子だ。お前や他の者にも受け入れられるはずがないと思ってアレクは隠してたに決まっている。それと……。俺がユーリの存在を知っているのは、アレクに聞いたからだ」

「いつ？」と、ミハエルはさらに聞いた。だす。

レヴァンは一瞬口を閉ざしたが、またゆっくりと開く。

「……アレクが殺される前日だ」

「……」

みんな嫌なことを思い出したのか、黙り込んでしまった。沈黙が続く。

ユリウスはいい加減この空気に疲れてきた。

「で、結局3人は悪魔ということでもいいんですね？」とユリウスは

沈黙を破る。

ユリウスの言葉に3人は一応頷いた。

「では、ミハエルさん。俺はまだあなた達がここに居る目的を聞いていません。そろそろ答えてもらいたいんですけどね?」

ミハエルは腹の探り合いを諦めたのか、一度溜息をついてから話し始めた。

「最初は、現魔王。ラザロスを倒すためにこの学園を利用しようと潜り込んだ。勿論、今もその思いは変わらない。だが、それよりも先にやりたいことができてしまったんだ。」

「何を?」

ミハエルは苦笑いし、瞳を伏せた。

「……悪魔混じりの子たちの保護だよ。始めにリヴァインに来た時、僕は驚いたよ。彼らの受ける扱いの酷さにね……」

ミハエルの言葉を聞いて、ユリウスは苦虫を噛むような顔をした。ユリウス自身も悪魔混じりの身。彼らとは同じ境遇だった。だから、彼らがどれ程の扱いを受けているかは痛いほど分かる。

「彼らの扱いは家畜以下だ。家畜ですら餌と寝床は与えられるというのに、彼らはそれすら与えられない。ただ一つ、与えられるのは暴力だけ。僕はそれを目の当たりにして、本当に悲しかった。僕ら悪魔の住むローデリアでもそこまで酷い扱いをされている者は見たことが無かったよ。この大陸に来て、人間の非道さに心底飽きた。だから僕は少しでも多くの悪魔混じりの子たちをこの学園のDクラスに保護しようとしているんだ」

「……この学園のDクラスはあなたが作っただんですか?」

「そうだよ」

「……よく、人間や精霊が許しましたね」

「うん、まあ、ほとんどの者には受け入れられていないけど、この学園長がね、話の分かる人だから。学園長にだけ許可をもらった感じなんだ。彼は僕が悪魔なのも知っている」

「……あなたを悪魔と知っていてこの学園に留め、悪魔混じり

の保護まで認めるなんて・・・何者なんですその学園長は」

「さあ？・・・見た感じはただの人間だよ」

「・・・よく分からないが、この学園の最高権力者は悪魔を嫌ってはいないようだ。うまくいけば、簡単に学園を利用し、魔王と対峙できる日が早く訪れるかもしれない。これはいい事を聞いたな。」

「・・・とりあえず、まずはミハエルたちを仲間にする必要があるな。彼らを仲間になれば、ローデリアからリヴァインに逃れてきた悪魔たちも仲間にできる可能性が高くなる。」

「ミハエルさん達の目的は最終的には魔王ラザロスを倒すことですよね？」

ユリウスの問いにミハエルは頷いた。

「でしたら、俺と手を組みませんか？俺がこの学園に入ったのも貴方たちと同じ目的ですから」

ミハエルは、まさかそんな事を言われるとは思っていなかったという顔をする。

「・・・君もラザロスを殺したいと？」

「ええ、これは仇討ちですからね」ユリウスは微笑む。

「・・・アレクシスの子というのが本当かどうか定かではないけど、仇討ちとは、父親の？」

「まあ・・・父と母の、ですよ」

「・・・母というのは、人間の方だろ？亡くなってしまったのかい？」

ユリウスは冷笑を浮かべて語る。

「ええ、悪魔に・・・ラザロスの手下に殺されました。本当の狙いは俺だったんですけどね・・・この通り、俺は生き延びてしまった」

ユリウスの話を聞き、ミハエルは「すまない」と言った。何に對しての言葉なのかは深く追求はしない。別に同情は必要としていないからね。今、必要なのは力と共に闘う仲間だ。

だが、彼らまだ俺が元魔王アレクシスの実子だと信じていないよ

うだ。やはり、このままでは仲間にはなってもらえないかな。

「…….…….…….しょうがない。」

「まだ俺が元魔王の実子と認めてもらえないようなので、証拠を見せましよう。その方が手っ取り早いですし」

そう言くと、ユリウスは立ち上がりレヴァンに結界を張るように言った。

ユリウスはゆっくりと目を閉じる。

「では、いきます」

その言葉の直後、リビングの気温が一気に下がり、部屋の家具がガタガタと動き始める。

張り詰めた空気にミハエル、ソニア、ダニエルは息を飲んだ。

ユリウスの魔力がぐんぐん上昇していく。ミハエルはユリウスから感じる膨大で禍々しい魔力に恐怖さえ感じた。

(…….…….この魔力の感じは……アレクシスと同じ…….)

ユリウスの銀色の髪が徐々に濃くなっていき、漆黒の髪に変化した。閉じられていた目がゆっくりと開かれる。

その瞳は――

「…….…….…….あか…….」

ぼそりとミハエルが呟いた。

そう、ユリウスの瞳はまるで、血のように真っ赤に染まった深紅の色。普通、悪魔たちの瞳の色は黄金色だ。だが、極わずかな者だけが異なる瞳の色を持つ。そのわずかの者とは、魔王の直系の者達だ。彼らだけが、赤い瞳を持って生まれる。

そして、ユリウスの深紅の瞳は魔王の血筋という証。これでは疑いようもない、彼は紛れもなく魔王の子…….

「…….…….確かに、間違いないようだね。…….まさか、アレクシスが人間と子を作っていたとは…….」ミハエルは驚き半分呆れ半分といった表情し、「本当に赤い瞳をしているのね…….

驚きました」と、ソニアはビックリ仰天の顔をしている。ダニエルも同じく。

「で、どうですか？さっきの俺の申し出、受けてもらえますか？」
ユリウスは深紅の瞳で三人の顔を順番に見ていく。ソニアとダニエルは困ったというようにミハエルの様子を窺う。どうやら、彼らはミハエルの指示に従うようだ。ミハエルさえ説得すれば二人も仲間になる。

ミハエルは静かに目を閉じ、じっとしていたが、数分後、彼はフツと表情を緩め、「分かりました。その申し出お受けしましょう。ユリウス様」とソファアから立ちあがり、胸の前に手を置いて恭しく首を垂れる。ミハエルの今までの口調とは打って変わった話し方にユリウスは苦笑いをした。

「有難うございます。ですが、……その呼び方は今後しないようにして下さい。いくら魔王の血を引いているといっても俺はただの悪魔混じりです。あなた方が気を使う必要は一切ありません。ラザロスを倒し、新たに魔王となった者に尽くして下さい」ユリウスは淡々と言った。

正直、こういう扱いは慣れない。今まで蔑み怖がられるだけの生活しかして来なかったのだから。

だが、ユリウスの言葉に、なぜかミハエル、ソニア、ダニエルは悲しいような、困り果てたようなよく分からない表情をする。

ユリウスは怪訝に思い「どうしたんです？」と聞いた。

ミハエルは、慎重な面持ちで話し出す。

「……実は、魔王の血を引く我らが王族はもう、貴方だけなのです」

一瞬、ミハエルが何を言ったのか理解できなかった。

「それは……」どうということですか。と、問おうとしたが、レヴァンが先にミハエルに詰め寄ったので言葉を飲み込んだ。

「それはどうということだ。王族は一人二人だけではないだろ。なぜ十年やそこらで王族がいなくなるんだ。俺がローデリアを出てから

何があった」

ユリウスは、レヴァンから乱れた魔力を感じた。常に魔力を完璧に消しているレヴァンのこの動揺ぶり……いや、きっとこれは動揺などではないだろう、行き場のない怒りが漏れ出しているのだ。多分、レヴァンはミハエルの口から告げられることが、何なのか分かっていて。だから怒りが抑えきれないのだろう。ユリウス自身、なぜ王族がいなくなったのか、大体見当はつく。

ミハエルはユリウスの想像通りの答えを口にした。「現魔王ラザロスの命により、王族全員が殺されました。しかし、これは極少数の者しか知らないことです。これを知っているのは、我々とリヴァインに逃げてきた者、そしてラザロスとその側近だけです」

ユリウスは先ほどから疑問に思っていることがある。

（王族はもう俺だけだとミハエルは確かに言った。なら、あいつは……）

「ミハエルさん、ラザロスは王族ではないんですか？」

「ええ、彼は王族の血を引いていません。ただの貴族でした」

「……では、王族以外で魔王になることは可能ということですか？」

「いえ……本来は王族の者が魔王となることが決まっています。ですが、今回は異例のことです。ラザロスは自らを魔王と言っていますが、実際は多くの悪魔が彼を魔王と認めていないのが現状です」
「認めていない？でも父が死んで既に十年は経っています。十年も魔王をしていて、未だに民衆に認められていないと？」

「理由は簡単です。ラザロスは齒向かう者には容赦しません。彼のやり方に不満を持つ者はことごとく殺されていきます……民衆たちはただ言うことを聞くしかないのです。彼は暴力によって魔王という地位を守っているに過ぎません」

「……倒すべき敵はラザロスとその駒だけのようだ。多くの悪魔はラザロスを憎んでいる……ね。」

「では、……ラザロスさえ倒せば全て解決ということですか」

ユリウスのこの言葉をミハエルは否定した。

「いえ、解決ではありません」

「なぜ？」

現在、繰り広げられている戦争は、現魔王が人間を根絶やしにしようとしたものだ。全ての元凶であるラザロスさえ倒せば、人間や精霊と争うこともなくなり、悪魔たちも暴君魔王がいなくなり安心して暮らせるではないか。これの何が解決でないのか。ユリウスにはまったく理解できない。

ミハエルは真剣な表情で「新たな魔王が必要です」と言う。

それはそうだろう。生き物には必ず従える者と従う者がいる。従える者がいないと民はまとまらないものだ。従える者が気に入らず反乱を起こすことはあるが、結局、別の者がその役目を負うことになる。だが、そんなことユリウスにはどうでもよかった。ユリウスはラザロスを殺せさえすればいいのだ。その後のことなど悪魔たちが勝手にやっていたら済むことだ。

「確かに新たな魔王は必要ですね。ラザロスを倒してから頑張って決めて下さい」

ユリウスの返答にミハエルは又もや否定する。

「いえ、その必要はありません。もう決めましたから」

「準備が早いですね。それは良かったです。では、後はラザロスを倒すだけです」

ユリウスはどうでもいいといった風に淡々と言葉を交わす。が、ミハエルの次の言葉にユリウスは啞然とした。

「はい。次期魔王はユリウス様にお願いしたいと思っております」
「・・・・・・・・こいつの頭は虫でも湧いたのか？」

「・・・・・・・・先ほども言いましたよね？俺は悪魔混じりです。魔王になる資格もないし、そのつもりも全くありません。王族が滅びたなら、悪魔たちの中で納得できる者を選んで下さい」

ユリウスは断固拒否したが、ミハエルはしつこく食い下がって来る。
「確かにユリウス様は悪魔混じりです。ですが、前魔王に匹敵するその強大な魔力と悪魔たちを従えるに相応しい深紅の瞳を持つ貴方様に是非、魔王なつて頂きたいのです」

ユリウスはうんざりしてきた。

「俺はそんな器じゃありません。他を当たって下さい」

「いいえ、貴方が承諾して下さるまで言い続けます。ソニアとダニエルも賛成でしょう？」

ダニエルはどうすればいいか分からずでオロオロしているが、ソニアは「勿論ですわ!」と大賛成だ。

ユリウスはどうしたものかとレヴァンを見やる。レヴァンは溜息をつきながら「その件はラザロスを倒してからでいいだろう。ユーリもそんな重大なこと今すぐには決めれない」

レヴァンの言葉にミハエルはしうがないといった顔をする。

「そうだね。まずはラザロスを魔王の座から引きずり降ろさないと」
ミハエルはそう言ってレヴァンからユリウスに視線を戻した。

「ですが、ユリウス様。ラザロスを倒した後には、良いご返答をお待ちしております」

「……良い返答ね、あくまでこいつは俺を魔王にしたいらしい。その気は無いと言っているのに。」

「とりあえず、いい加減その話し方やめてもらえませんか?そういう話し方された経験がないので正直気持ち悪いです。普通に話して下さい。仮にも貴方はこの学園の教師で、俺は生徒なんですから」
ミハエルは肩をすくめる。

「分かった。でも、いずれはこの口調にも慣れてもらわないといけないから、このメンツの時だけは魔王陛下に対する話し方で行くよ……だから、ならないと言っているだろう。ユリウスは溜息を吐きながら、扉へと足を向ける。

「俺は一旦、訓練に戻ります。今後の動きに関しては、また後日話し合います」

そう言い残してユリウスは扉を開け訓練場へと戻って行った。

ユリウスが宿舎を出て行った後、ミハエルはレヴァンに顔を向ける。
「ところでレヴァン、なぜ君がアレクシスの死に際にそばにいなかったのかずつと疑問だったんだ。あの時一体どこに居たんだ。なぜ主のそばを離れた」

ユリウスが居た時とは打って変わってミハエルの問いただす言葉には怒気が含まれていた。ミハエルが怒るのも当然のことだろう。もし俺がアレクのそばを離れなければアレクは死ななかったかもしれないのだから。

「……アレクに命じられたんだ。ユーリを守れと……どうやって情報を掴んだか分かんがラザロスはユーリの存在を知っていた。アレクはユーリとその母親の命を脅しに使われたんだ。そして、アレクは殺される前日、俺にユーリと母親の存在を明かし、自分に何が起きようと二人を守り抜くよう命じた。その後、俺は急いでリヴァインに向かった。が、一足遅かったんだ……既に母親はラザロスの手下に殺されていた。そして、俺の目の前には怒り暴走するユーリの姿があった……。俺は、アレクの最後の命令を果たし切れなかった……。だから、ユーリだけはこの命に代えても守り抜くと誓った」

レヴァンの話を聞いたミハエルの顔からはもう怒りの感情は出ていなかった。それと変わって、悔しさと悲しみの表情をしていた。

「アレクシスは……妻と我が子を守るために……君を……」

「ああ、あいつは昔からそういう奴だった。自分より他人のことを優先する、王らしくない王だ……。確かに俺がアレクの命に従わなかったら今とは違う未来になっていただろう。だが、その違う未来をアレクは決して望まなかった。その未来を受け入れてしまつたら、アレクが命よりも大切にしていた宝を失ってしまうからだ。」

俺も、ユーリを優先した事を悔やんだことはない。ユーリは、アレクにとっても、俺にとっても大切な宝だ」

「宝か……レヴァン。君の判断は正解だよ。アレクシスはどう死んでしまったが、ユリウス君の中に彼の存在を確かに感じるんだ。ユリウス君は父親にそっくりだ。……今まで、彼を守っていてくれて有難う。これからは僕も命が掛けてユリウス君を守るよ。アレクシスの代わりにね」

ミハエルは柔らかく微笑み、レヴァンはフィツとそっぽを向き「当たり前だ」と言い返す。

二人のやり取りを見守りながらソニアとダニエルも共に微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9867w/>

銀色の悪魔

2011年10月22日20時21分発行